

# 村上春樹の小説「騎士団長殺し」への私論

甲南大学学生相談室 青木健次

## I. はじめに

小説「騎士団長殺し」を読みはじめてもう1年半になる。もちろん、その間に他の本も読んで、学生相談の現場でフルタイムで働いているので、そればかり読んでいたわけではない。面白いのだが、様々な「仕掛け」がしてありなかなか理解しにくい。さらりと読んで「ああ面白かった」ですませる読み方もあるだろう。しかし、私にとって多くの重い問いを投げかけてくる小説なので、あれこれ考えさせられることが多く、私なりの「理解」をしたい。そうすると、広義の心理療法をなりわいとしている以上、深層心理学的な人間理解を試みるしかない。ある意味で、あらゆる現象を心的現象としてエネルギー論的に捉え、内的世界を想定し外的現象との相互作用を探っていく。この時明確な内一外の二分法は、日常では不可欠だが、心の層が深くなるほどその境界は曖昧となり完全な無意識では内も外もその境界が意識できない。そのような階層的でありつつ混沌としたものとして「私という現象」を考えていく。

村上春樹自身、ファンタジイは個人的なものといっているので<sup>註1)</sup>、私なりに勝手に個人的読みを試みることにする。国語の入試問題ではないのだから、正しい答というものにこだわる必要もあるまい。要はよく咀嚼して味わって、かなりの反芻を続けたのだが、私なりの楽しみとなり栄養となればよいはずだ。

大きな転機となったのは、小説中の日本画家雨田具彦が最晩年をすごし死を迎えた施設が想定されている「伊豆高原」の高台に立った時だった。小説の描写とはちがって南方にどこまでも続く水平線などなく、眼前には伊豆大島からはじまっ

て、左から右へ、利島、新島、神津島と伊豆七島が並んでいる。平べったいのは式根島か、ぼんやり見えるのは流人の島八丈島か。すばらしい青天ではあったが、ある意味では青天の霹靂であった。熱海へと電車で北上しながら、「水平線が広がり真鶴半島も見える場所」を探した。伊東市のあたりだった、政彦がいい鯛を手に入れた所だ。はたと思いついた。これは村上春樹が想定した雨田具彦の心象風景なのだ。透き通った空気なのか、よく見れば、広い海の彼方に三浦半島から房総半島が緑のように続いている、とてつもなく大きな「たらい」のようでもある。真鶴半島が見えるということは、小田原市郊外の山々も見え、想定上の具彦のアトリエのあるあたりも視界の中にあるのだろう。つまり、小説の中で最も長く生き、第2次大戦前後の大混乱に直接身を置いていた画家が、92才で死んでいく時に、自分の人生を振り返ってみているということなのだろう。地図的な正確さではなく、具彦が画題とした飛鳥時代の庶民の生活が時代考証的な正確さにこだわるのではないように、心象風景としてこそ見ていくべきなのだ。設定には設定の意味があり、そこから意味を読みだすことができるはずだ。

この小説は村上春樹のワンダーランドなのだ、ファンタジイなのだ。日本でありつつ日本ではなく、現代でありつつ現代ではない。心的現象、主観性ということからみれば、常に「現実」には個人性が含まれる。偏りすぎると危険だが、全くの客観性の中には個人はいない。小説の主人公が具彦の絵画「騎士団長殺し」を見つけだし、それとことん向き合うことで、いささか奇妙なものも含む、いくつかの経験をしていく。それを追体験

していくことで、私なりの小説「騎士団長殺し」の理解の作業としたい。個人的な読みではあるが村上春樹が小説中に明示し暗示した「ヒント」を中心とする。ただし、私論なので少しばかり補助線を引き燃料も加えることにする。咀嚼の比喩を続ければ、反芻してよく混ぜ合せ、消化酵素の働き、さらに腸内細菌群の助けを必要とするのである。

## II. 全体の構図、登場人物、地名

この小説は30才で結婚し36才になった男の主人公が、3才年下の妻から別れ話をもちだされ、別居し一人暮らしをしてあれこれ経験し、2008年の10カ月程で、昔風にいえば十月十日（とつきとおか）たって、元の鞘に収まるまでの話である。死と再生のプロセスともまとめるので、全体を宗教的修業（特に修験道やマンダラ瞑想）としてみていくことにする。各章の数字にかぶせられた、○、□、△の重なった図表も、瞑想にも使う抽象的図形であろう。

主人公は商品として肖像画を描いている。つまりサラリーマンではない。別れ話を切り出され、納得はできないまま、その日のうちに住居を出ていく。自動車で東京をあちこち走った後、高速を使って日本海側に出る。一般道を日本海に沿うように北へ向かい、北海道を回って、今度は太平洋側を南下して東京へ戻る。肖像画のエージェントに一方的に断りの電話を入れたあとで、ケータイを投げ捨てたので、元々他人との交流の少ない男だが、外部からの連絡はとれない。福島県のあたりで自動車は寿命となり動かなくなってしまって、しかるべき修理所に捨てた。約2カ月弱、四国の歩き遍路が出来るくらいの期間だ。行脚の段階である。

友人の雨田政彦から、その父具彦が長く住んでいた小田原市郊外の山上のアトリエ兼住宅を借り一人暮らしをする。こもりの段階である。具彦は高名な日本画家であるが、老衰のため伊豆高原の施設に移り、空屋だったのだ。主人公は具彦が密

封して屋根裏に隠していた「騎士団長殺し」と題された絵を、夜の知患者のみみずくに導かれて見つけ出す。意外な援助者の助け。迷ったが秘かに封を解き、ろくな食事もとらないまま眺め続ける。マンダラ瞑想、内界への旅の段階。

免色渉という変わった「隣人」が、法外な報酬を払って肖像画をネタに近づいてくる。引き受けるがこれまでのスタイルでの営業用肖像画にならず、作品としての人物画になっていく。渉はいくつかの資金も提供し、「好奇心が強いので」、具彦についても出版物のみではとうてい知りえない情報を提供してくれたりもする。不思議な援助者。それらによって具彦が留学していたウィーンでのナチの暴力支配、日本軍の南京虐殺と雨田兄弟の関わりが語られ、少しずつ核心に迫っていく。実は、渉には自分の娘の可能性のある秋川まりえの肖像画を描かせて個人的に所有したい意図がある。この意図から彼の行動は出てくる。

主人公は夜中の2時すぎ、丑三つ刻の不思議な音に導かれ、ここでも渉に助けられて、雑木林の中の穴を暴き、仏具の如き物を見つけ出す。たぶん手錫杖だろう。行脚の時の錫杖と違って、時に行場をよじ登ったりする修験道では笈におさめることのできる手に持つ錫杖を用いる。金属製の頭部の輪に六道を表わす6個の鏝が通してあって、振るとシャラシャラと音がする。土中なのに柄の木の部分も腐っていなかったのならそんなに古いものではないのだろう。ただ、その錫杖の主（の骨など）は見つからなかった。主人公はアトリエにそれを置く。それを依代としてなのだろう、身長60cmのリトルピープル・イデア騎士団長が出現する。いよいよ村上春樹のワンダーランドらしくなっていく。

政彦が伊豆高原への通り道に時に訪れ、別居中の妻の情報を伝えたり、みごとな鯛を鮮やかに出刃で刺身に造ってくれたり、2人は語り合う。現実的な援助者である。渉の肖像画は完成し、豪邸での祝いの宴にイデア騎士団長も招待される。渉

の頼みと根回しでまりえの肖像画を描くこととなり、渉は様子を見にくる。肖像画の完成も間近になって、まりえが失踪する。実はふとしのび込んだ渉の屋敷に閉じ込められてしまったのだが、「具彦」がアトリエへ出現する。

主人公はアイデア騎士団長の指示で施設の具彦を訪れる。さらに叱咤に従ってアイデアを殺し、開かれた通路を使って地底へ下り、川を渡してもらい、狭い洞穴をなんとか通り抜けて、なぜかアトリエの側の穴の中へと戻ってくる。渉に救い出されるまで出られないのだが。修業的には、試練、地下への旅、生死の川を渡って苦しい産道を抜けて再生したことになるだろう。冥界の物を口にすると現実に戻れなくなるという神話や昔話が多いのだが、主人公は無味無臭の闇の水を呑む。地底で助けてくれた少女たちの棲む闇の一部を胎内に持ったのだ。新たな体の獲得である。

まりえは戻ってくるが、閉じ込められた時の恐怖から（強制的なこもり）しゃべれなくなっている。主人公は絵画「騎士団長殺し」を、まりえに手伝ってもらって、再度密封し屋根裏に戻す。そこにみみずくがいて、まりえにそれを見せることをきっかけに、彼女は声が出るようになる。助けることで助けられる段階である。

主人公は、結局離婚しなかった妻と同居を再開する。彼女が別の男との間に設けた女の子を共に育てることにする。この物語は元々回想形式であったが、2011年の東日本大震災の時へと戻ってきた。大津波があらゆる物を押し流していくシーンを幼女に見せまいとする主人公。自分はしっかり見て、かつ、支えてくれるもののあることを信じつつ、生きていく決意を語る。

地名、主人公の命名であるが、みごとなほどに主人公の名前は出てこない。読者が勝手にどんな名前を代入してもよいのだろう。雨田家は、必要な人物の名前は出ている。秋川家もだいたいある。ただ肝心なまりえの母の名はみいだせない。主人公の妻の実家の苗字もわからない。名もなき

人達というわけでもないだろう。村上春樹の意図はどのへんにあるのだろうか。

まず地名。岩手県から宮城県に入ったあたりの港町。荒々しく危険な男女間の諍いにまきこまれることになり、女と激しい性交をし、男の方はその後主人公の近くに何度か現れる。男女のあり方の生々しく激しいタイプの典型としてあるのだろう。男の方は後に主人公の夢の中にまで登場し、深層心理学的にも重要さがわかりやすい。村上作品中では「白のスバルフォレストの男」と呼ばれているのだが、一回一回車種名で呼びたくもない。ちなみに村上春樹は本作品でも自動車の色彩や車種を記号的象徴的に使っているようだ。作品の題名にしたことまでである。「色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年」の「私論」は、もし書くとしたら、その作品の理解を試みる時に色彩論を行うこととする。車種名やその意味性は当面無視する。

この地名を女川（おながわ）とする。女川という漁師町はこのあたりに実在する。男女間の渡り難い川の意を込めることにした。この実在の町には原発があり、大地震時に東北北海道新幹線に緊急速報を送るシステムもある。津波の常襲地なので女川原発は海水面よりはやや高い所に作ってあり2011年の大津波でもからくも大被害をまぬがれた。1995年の阪神淡路大震災は早朝で新幹線の動き出す直前だった。設定上まりえはこの年に生まれている。千人以上を乗せ毎時250km以上で走行中に脱線したら大災害となろう。プレート型の地震の場合、海に突出した場所に高性能地震計を設置し走行中の新幹線に光の速度で緊急速報が送られ車両を止めるシステムが整えられた。当然ながら橋脚等の他のハードシステムも強化された。東日本大震災は運転中であつたがみごとに止めることができ、大事故にならなかった。だがこの大震災では大津波や福島原発の事故で甚大な被害が生じてしまった。いつ終るとも知れぬ復旧工事は継続中であり、新たな想定のもとに遠からず起こ

る南海トラフ地震などへの対策がハード面でもソフト面でも徐々に進められている。安全性は向上させねばならない。ずいぶん大きな予算を必要とし、一気にというわけにもいかないだろうが、「大丈夫だろう」はもう許されない。

日本列島は地震と火山活動で形成されてきたし、度々の洪水を伴う大量の雨で平野も広がり3千年ほど前からは稲作が展開していった。水と闘い利用してきたのだ。多くの犠牲を払いながら。そもそもプレートのぶつかり合いで日本列島がそれらしい形となったのは、3千万年ほどの昔、地質年代的にはほんの近い昔だ。地震、噴火、洪水はこれからも避けがたい。観測、解明、対策は続けていくしかないだろう。絶対の安全はないかもしれないが。

一方、3千万年ほど以前に原猿類と真猿類が別れた。日本猿も類人猿も人類もこの真猿類に含まれ全て昼行性だ。人類が類人猿の一番の近縁種チンパンジーとの共通祖先と別れたのが約700万年前。ホモサピエンス（現生人類）の出現は20万年ほど前。更科（2018）<sup>註2)</sup>によれば人類はごく初期から直立2足歩行をしており、一夫一婦だったとも考えられるという。夫は直立歩行して腕に食料を抱えて妻子の下に運んだのだと。だがまずは食料を手に入れなければならない。特に肉を手に入れようとすれば初期にはライオンやサーベルタイガーの食べ残しを、ライバルを追い払って、手に入れなければならない。直接狩りができるようになったのはいつごろだろう。道具も技術もある。はじめのうちは自由になった腕で自然石を投げつけたり、手頃な棒や動物の骨を使ったのだろう。加工の跡がないと、人類考古学的研究も困難だろう。追い払うべきライバルにはハイエナもいればハゲタカも含まれ、時には他の人類や同種の人類も含まれたらう。決して安全で楽しい採集狩猟生活の面だけではない。自然災害に対してはただ逃げるのみ。農業の開始による人口の増加は争いを大きくし、道具の進歩は戦争をすさまじい

ものとした。しかし技術は、知的なものであれ道具的なものであれ良い面もある。課題として限りなく重く不可避なのだが、ホモサピエンスの社会はこれを使いこなせるのだろうか。2度の世界大戦を経験した20世紀。雨田具彦はこの2度目の大戦の中で苦痛と苦悩の前半生を生きた。とにかく昔に戻る方法はないのだから前に進まねばならない。主人公は21世紀を生きるその世代の人類だ。

一夫一婦制であっても男女間のトラブルは絶えない。個人間の争いであっても時に生死にかかわる。ニコニコ離婚してその後も「友達でいる」のは大変なのだ。主人公にとって別れ話のあとの一人旅で、男女川で男女の生々しい争いにまきこまれたのは重要であり、小説の進行の中でこの出来事が何度も想起されていく。その度毎に心のより生々しい現実へと掘り下げられていくかのようだ。ついには夢の中でこの男のように逃げた妻を殺しにいく。鉦物の露天掘りのイメージだが、元々の自然な地層ではない。小説中に明示暗示された作品によって、春樹自身の作品も含め、何度もあちこちが掘り返されている。男女川の地では森鷗外の「阿部一族」<sup>註3)</sup>が持ち込まれている。この一瞬を生きる現代人も様々な歴史的な、あるいは神話や小説の断片を、かなり未整理なまま抱え込んで生きているのだ。穏やかな日々が続いていくならそれはすばらしい。主人公と妻の穏やかな日々は徐々に摩耗して行って別れ話の危機となった。小説のはじめから「元の鞘に戻るまでの話」とされているのだから、このような荒々しくも活動的な男女のあり方は、2人に欠けていたものとの出会いなのであろう。荒々しく制御は難しくそうだが、生命の流れを豊かにする上で不可欠なものなのだろう。この男女川の生命の水は、適切な方法で適量を汲み上げねばならない。

主人公の名は顔描卓とする。職業として肖像画を描き、プロローグ（前奏曲）では、地底で生死の川の渡し守りだった「顔なし」の肖像画を描こうとして描けなかった。そのため渡河賃として渡

したペンギンのストラップ（まりえのお守り）は取り戻せない。まりえを探してアトリエ近くの穴に降りた時見つけたものである。鎖が切れていたわけでもないのになぜかそこにあった。「穴」が呼びよせたのだろうか。まりえは穴を覗いたことはあるようだからひそかに落としておいたのだろうか。品物としてはたいしたものではないけれど、まりえの想いのこもった大事なものであり、大切なものだ。再び顔なしが持って地下の川の持ち場に戻ってしまったのだろう。男女川の男の顔も原色をいくつか塗りたくった段階で止ってしまった。まりえは「姿が見える」といい、恐がるのだが。顔を描くとはその人の外的特徴だけではなくてその人らしさ（ペルソナ、パーソナリティ）をも把握しなければならない。さらに「好きな部分」も見つけなければならない。今のところ、顔なしや男女川の男の顔はまだ卓の手に負えない。いつか描けるのだろうか。男女川の男の描きかけの肖像画は後に焼失してしまうのだが。

袖から別れ話を持ちだされた頃、卓はそれなりのスタイルを持ち業界内の評価も高いのだが、気乗りしなくなっている。「芸術家として自分の描きたい絵を描きたい」とうそぶきつつ実際にはやらないし、やれない。それが一連の体験を経て再び同居し、室ちゃんも生まれて、大事な家族のための大事な仕事として、しっかりと肖像画に取り組むようになる。

31章（間奏曲）にはどこかの収容所で（ナチによるものか）収容された画家が、全く不本意に敵の肖像を描いている。表情に不快の念を出すことも許されない。敵につかまってしまうと、その日一日を生き延びるために否応なく描かねばならないのだ。腹の中に苦い思いを隠しこむ画家と、「家族に送る」と喜ぶ敵たち。もし戦争がなければ敵でも味方でもなく、どちらもただの生活人・家庭人としての日々を、それなりの苦勞と喜びの内に送っていたことだろう。人々の生活は津波にも洪水にも、時代の流れにも押し流されてしまう

ものなのだ、どうにもあっけなく。個人は、その生活は感情の激流に流されてしまうこともある。卓は全く気づかなかったが、妻との交流はやせ細り、袖は別の男の下へと流されていってしまった。末には再び合うことになるのだが。

卓の肖像画は商品としては十分に評価されている。しかし画家としては無名だし、具彦のアトリエを出てからは「芸術作品」を描こうともしていない。もっとも業界内でそれなりの評価を得て生活の資となるならば立派なものだ。家庭人として生活人として。渉との会話で時に取り沙汰されたゴッホ。存命中は世間にも親にも全く理解も評価もされず、没後に絵画史上の大家となった、最後は自殺した画家。比べる必要もあるまい。したがって卓れているとも卓れていないともいえないので卓とした。人生は他人の評価によってその価値が決まるものでもないのだろう。つついやりがちだが。

免色渉について。作中で名前がついているし、唯一の挿し絵の如くに名刺まで紹介されている。実在しうるといえば実在しうるが、不思議な人物である。ストーリーの展開はこの男の意図によって進められていくともいえるので、ここでまとめておく。設定された出身地によって村上春樹の以前の作品（海辺のカフカ）<sup>註4</sup>を継承する、四国はお遍路の地でもある。免色の色は仏説の色受想行識の色であり、色声香味触法の色でもあろう。無彩色も色であるとはいえ、髪はまっ白。父と2人の兄は薄毛、家族や子ども時代の情報はこれしかないが、家庭環境のせいでも他の人と一緒に暮らせない人間に育ったという。若い80年代90年代にITを駆使して情報をすばやく集め鋭く分析し、大胆に決断し大金を稼いだらしい。株や通貨だけでなくM&Aも巧みだったらしい。その中にイギリスのウィスキー会社もあったようだ。その話の流れからジュラ島北端のスパルタンな環境で「1984」を執筆したジョージ・オーウェルのことが語られる。「1Q84」を書いた村上春樹にとって

最も重要な作家の一人だ。

50才を前にして、およそ金で解決できるものは全て解決可能なほどの金を手にして会社をたたみ、無職になった。元恋人の謎のような遺書がきっかけだろう。それを吟味し調べ、まりえが自分の娘である可能性のあることに気づく。まりえを遠くから眺めるために強引に白い豪邸を手に入れ、まりえの回りに情報収集のための網を張って卓の出現を知る。遠大な計画の下にまず自分の肖像画を頼み込む。

物語の前半はこの男の意図計画によって動いていく。しかし彼は絵画「騎士団長殺し」を知らないし、アイデア騎士団長にも会えない。あの穴も彼にとって長期拘留された東京拘置所の壁を思いださせるだけで、他次元への通路の要素には気づかない。あくまで高さ3mは、人を閉じこめるのに有効な壁なのだ。自分自身にも強いタガをはめ多くを閉じこめている。それでもこの男の金と話題の提供があってはじめて物語はふくらんでいく。

屋敷の中では実に規則正しく生活する。使用人の口を恐れ日常のたいがいのことは自分です。日々掃除や洗濯をキッチンとするのに加え、週に一回専門の業者に屋敷の隅々まで掃除させる。ただ開かずの間があり、そのウォークインクローゼットには、かつての恋人でまりえの母(?)の衣類が大切に保管されている。後日、まりえがここに閉じこめられ恐怖におびえた時、知らずして「母のスカートの裾」をつかむことになる。

家中をきちんと整頓し、スポーツ、ピアノの練習、ITに向かったのデイトレード等日課もキッチリとしているのだが、まりえがアイデア騎士団長の指示によって家政婦部屋に隠れ、筋トレ室からナショナルジオグラフィックスを持ちだして暇つぶしに読むのには気づかない。番号順に並んでいないのだろうか、何か意味があるのだろうか。

卓から夜中の鈴の如き音について相談され、自分にも聞こえると同意し、場所を確認したあとは金も用立てすばやく業者を手配し、例の手錫杖を

掘り出す。まりえに近づくための意図から卓に「貸し」を作りたいので巧妙に動いているのかもしれない。人生観でもゲノムの運搬役、土塊、無と代表的なものを転々とし、あの世とか地底の世界とかとは無縁にみえる。地下への道の入り口へと案内していくのは、渉には扱えられないアイデア騎士団長の仕事であり、「顔なが」をおどして地下へと降りそこで道を探し決めていくのは卓なのだ。地上への通路を教え励ましてくれたのは、闇を棲家とする少女たち(ドンナアンナやコミチ)。ここでも援助者に助けられてではあるが。とても狭い脇の穴にもぐりこんでからは全く卓一人の、まさに必死の努力である。閉所恐怖症なのだ。もっとも、アトリエの近くの穴に戻ってからそこから出られないでいる卓だが、それを地上に助けだすのは再び渉だ。役割分担がはっきりしている。重なりあいのある分業にもみえるが、渉がアイデア騎士団長を屋敷に招待することになったのは、卓のふとした思いつきで穴の主だったかもしれない即身仏(ミイラ)の宴への招待を提案し、それをアイデア騎士団長が訂正させたのだ。渉はあくまで気の利いた冗談のつもりだろう。

ドンナアンナは絵画「騎士団長殺し」から抜けだしてきたリトルピープルである。衣装も飛鳥時代風だろう。コミチは声だけだ。地下にこんな世界なんてあるわけがないと批判する「合理主義者」に言っておくと、生死のピンチに「お兄ちゃんガンバって」と亡くなった妹の声が聞こえたとしたら、かえって「自然」ではないか。

渉は「直観にすぐれている」と自己分析しているが、そのひらめきはあくまで数値化できるものに限られているようだ。ただし感情の激しさを内に持ち、強力なタガでおさえこんでいるのだろう。想定外で卓の家でまりえや叔母の笙子に合った時は、目を白黒し顔を赤く青くする、うろたえて自動車へと逃げ戻る。数値化できる空気圧計は彼を落ち着かせるのにいい小道具かもしれない。次の訪問の時にはしっかりと紳士に戻っている。頑

固なタガは自己訓練の賜物なのだろう。だが白亜の屋敷ではタガがゆるんで、「免色くんであって免色くんでないもの」が徘徊することになる。まりえが門があいていたのでふと忍びこんでしまい、あわてて隠れたウォークインクローゼット。その扉をあけようとしたのも「免色くん」なのだろう。あきらかに人の気配を感じつつ迷う。もしここで開けて誰もいなかったら自分のひらめきを信じられなくなってしまう。実はまりえの母やまりえを常に求めているのかもしれない。昔の恋人の衣類を大量の虫防けをきちんと管理して大切に保存しているように。完成したまりえの肖像画を入手するのはタガを強固にするためかもしれない。あこがれ出ざる魂を封じておかないと危ういと恐れているのだろうか。でもそれでは深い関係を周りの人とも、移ろいゆく自然とも、築くことはできないだろう。

この小説の進行に不可欠の大きな役割を果たすのが、あくまで「触媒」であって、渉の「化学変化」を促し、命まで救うのだが、自身に変化はなかったようだ。この先、秋川家が良信の宗教のため破算した時（それを予言するようにヨシノブという名を与えられている）のために、その時まりえを直接援助できるように、笙子と結婚するかもしれない。あくまで意図、予測、計画でしか動けない男なのである。

### Ⅲ. 2人の出会いと別れ

2人が30歳少し前であった時、それぞれに付き合っている相手がいた。さらに卓の恋人は柚と親友でもあった。それが、卓が柚に一目ぼれして強引にアプローチし、ドン・ジョバンニ的情熱…困難な程ガンバル<sup>註5)</sup>。ついにデートにこぎつけ、サラサラと数分で卓の描いたスケッチが2人を急速に結び付けていく。柚「すごく生き生きしている」、卓「君が生き生きしているからだよ」、恐らくこのやり取りが柚の中に生命の灯をともし（あるいは強くした）。ところで卓は柚に、彼が15歳

の時、12歳で死んだ妹のことを重ねて見てしまうのだが、なぜそうなるのか自分でもわからない。外見がそんなに似ているわけでもない。視覚的記憶力にとりわけ優れ、それを自負し、妹の亡きあと大量のスケッチを描いたはずなのに。眼が似ていること、深く永遠を想わせる限りなさに気づくのは数カ月してからだ（多分ある程度関係が安定してからなのだろう）。この気づきの遅さはなんらかの抑圧がからんでいるのだろう。とうとう卓の口から「丁度3歳下の妹がいた」ことは柚に語られない。事実としては言ったとしても、その重要性は語らなかった。語れなかったのだろう。小説作品の回想の中でコミチとの思い出は少しずつ塗り重ねられていく、「ウサギの穴の底、富士の風穴の横穴、何より地底めぐりの闇の底の声」として。コミチは生きている間にすでに生死を超えた世界、永遠の世界、闇の世界を内に持っていたのだ、卓も妹の目からそこを覗き見ることができた。青天の霹靂どころか、いつ落雷があってもおかしくないような黒雲の下に暮らしていたコミチにとって、いくら一般に諸行無常といってもとりわけ死は身近だ。手術しうる限りは手術をしたのに、まだ不調を訴える心臓を抱えて生きることは、少女にとってどんなに厳しいものだったことだろう。しかし、それに弱音を吐かなかった。内に不思議の国のキャラクターたちもいる。生き生きとした闇を持つことによって。「本当にいるんだよ」。そこは住民が少しずつ変わっていく生きた世界だ。

一方、柚の闇はどこから来たのだろうか？東大一経一、一流銀行という経済的価値しか認めない家庭環境からだろうか。そんなのは方向性としては一般的だ。体現できるのは少ないとしても。ただ、これからこの人と結婚するという30歳の娘に「反対だ、5年ともたないだろう」と予言の如く呪いをかけるようにいう父親は多くはなからう。別の外的特徴、ハンサム男に病的に弱いというキャラに育ってしまった。

お互いに秘密を抱えたままの結婚だったが、趣味もあってはじめは、3年くらいは（石の上にも3年は逆の意味だろうが）楽しくいくものだ。だが少しずつずれていく。2人で話し合うべきこととしての子どもをもうけるかどうかの話し合いは先延ばし。柚は子どもができることはこれも病的に恐れている。卓は仕事としての肖像画をそれなりの評判を得て自分なりのスタイルでこなしつつ、「芸術家として自分の絵を描きたい」とぼやきつつ行動には出ない。時間的ゆとりはあるはずなのに、そうした形ではキャンバスに向かわない、向かえない。

2人の中でのからかいが2つ。卓は学生時代のアルバイトでトラックの荷台に閉じ込められ、閉所恐怖症を発症する。それが小さな棺におさめられた妹コミチの死と深く関係していることは理解している。ただ、それを柚に言っていない。言えない。そのためエレベーターに乗れなくて階段を走る卓。柚はそれをからかってしまう。一方、性交の最中に卓は柚をわざとすだちと呼ぶ。酸味ミカンとしては、大差はないかもしれない。しかし、柚はそれを好まない。2人の間がうまくいっている間は笑いのネタともなるかもしれない。が、少しずつ効いてくるのではないか。正しい名前は重要なのだ。先に行動に出たのは柚だった。たまたま出会った政彦の事務所の、柚からは5歳下のイケメンと付き合い始めてしまった。卓との関係が冷えてきて柚の病気が出てきてしまったようだ。ちなみに坂の上の行止りにある小田原のアトリエの卓に、週に1、2度目立つ赤い車で通ってくる人妻は卓の5歳年上だ。芸が細かい。こちらは純粹に技巧的に性の快感を求め合う。お互いに納得せずくではあったが二進も三進もいかない。卓にとっては、はじめに声をかけたのは卓であったが、先方からの連絡を待つのみを受け身的な一方的な関係だ。ちなみに同じ頃声をかけた、別の人妻とは短いつきあいのあとで別れてしまっている。こちらは高校教師の夫からみえない所をなく

られるという（具彦が受けたナチの拷問のようだ）夫婦間暴力があって、性交に対し苦痛と恐怖、復讐心があった。

卓の手上の人妻との関係は、突然の女性からの電話で終る。2人の娘のいる女性の、それまでは模範的なよい子であった上の娘が全くベッドから出てこなくなったのだ。それが2週間も続いていて、女性は娘の世話をする必要がでてきた。カウンセリングの現場に長くいた（今もいる）私には、子どものうち（無意識的なものも含め）感受性の鋭い者が家庭内の微妙な雰囲気の変化に反応してしまうことは時に経験することだ。

柚の「病気」はなんなのだろう。イケメンに弱いことに加え、妊娠を極度に恐れていて入念に避妊する。家族であることへの拒否か。しかし、別居してからイケメン男の子どもを何故か妊娠してしまう。かつ、一人で育てようとするのだ。2人が生活を共にしていた最後のころ2人の中に性行為はなくなる。「疲れてる」「その気になれない」等の柚の言い訳を卓は信じる。信じるというより信じようとする。疑いの芽を摘んでしまう、見ないようにする。軽視する、無視するのだ。別居してからの1人での旅行中に夢の中で、自分の中に激しい嫉妬心や柚への欲望、さらに後には殺意にさえつながる復讐心などを自覚することになる。生々しい感情は重い、時にはうとうしい。しかし、この重さが足を大地にしっかり立たせるのだ。

別れ話を口にしたのも柚だった。微妙な流れではある。予言の如き夢を見たのだろうか。別居の準備も不十分なまま「私が悪いんだから、数日中に私が出ていく」と。しかも、かつ、「友だちでいてくれる!？」と。即刻感情をふり切って自動車に乗り込み出て行ったのは卓の方だった。その後も離婚届の用紙が小田原の卓の下に送られてきて、即座に捺印して返送するが、とうとう提出はされないままとなり、別居は解消されることになる。卓は未練を振り切ろうとして、夢で「本心」



を告げられ、柚はひきずる感情をぐずぐずと大事にしたということだろうか。

重大な出来事として、柚の妊娠がある。生物学的父親はそのハンサム男だ、他に可能性はない、柚を疑う事もない。ここでの柚の考え方は、産んで一人で育てようとする、論理を超える、仮にさずかりもの、予定外のことと考えたとしても、目の前に交際中の生物学上の父親がいるのだから、「この男と一緒になれ」という天の声かしらと考えた方が筋が通る。一方、卓は夢の中での一方的な性交によって柚を妊娠させたのではないかと考える、これも論理を超える。

ただし、卓の方はアイデア騎士団長殺し、地底巡り、免色による救出、まりえとの秘密の共有によって大きな変化があったであろうことは理解できなくはない。「柚とやりなおしたい、柚が産む子供なら自分の子供だ、一緒に育てたい…」別れ話のころの、堂々巡りの投げやりの日々を送る卓とは違うのだ。この変化（成長と呼んでもいいだろう）がどのように形成されていったかがこの小説の重要なテーマの1つである。

#### IV. 日本画による絵画「騎士団長殺し」

卓の体験にとって、具彦によって飛鳥時代の人物として描かれた絵画「騎士団長殺し」を、発見しひそかに封を解き、何週間にも渡って凝視し続けたのはきわめて重大なことである。もちろん、村上春樹が小説としてこういう流れを創ったのだがここではあくまで作品中で考える。ポイントは3つ、なぜ洋画から日本画に転じたか、なぜ流血のシーンとし、かつ隠したか、なぜ飛鳥時代としたか。

まず、日本画への転向。古きよき日本を描きたいといったものでは絶対でない。現実逃避でもノスタルジーでも、懐古趣味でもない。そういう批判をする人たちがそが飛鳥時代をユートピア化し、幻想を眼で見ているのだ。眼前の現実のある断面と向き合わない芸術作品はありえない。鑑賞

者がどう受けとめようともそれはかまわないのだが、芸術家は現実そのものを観照して絵画であれ文章であれなんとか表現しようとするのではないか。だから具彦も気に入らない作品は焼き捨てた。

やはり洋画はウィーン時代の記憶とつながりすぎるのだろう。そして洋画で現代の庶民を描いても、あの時代（戦後の混乱期）では政治性をおびてしまう。政治というものが悪いわけではないが、政治運動労働運動がきわめて活発でずいぶん血も流された。「八紘一宇」なる壮大な旗印の下に大量の流血を見たのだ。「平和」や「平等」のためにさえ流される血、この絶対的矛盾。

具彦が「血の流れない世界」を夢みただろうことはまちがいあるまい。どんな絵画であったかは想像するしかないが、その作品は静謐なものだったのだろう。飛鳥時代にも多くの流血の争いはあったのだがそれは避けたかっただろう。だが、絵画「騎士団長殺し」では、飛鳥時代の衣装で、ドン・ジョバンニの剣が騎士団長の心臓を突き刺しどっと血が噴きだしている（そう描写されている）。ところが、卓が具彦の居室でアイデア騎士団長を出刃（政彦が小田原のアトリエで使ったのに何故か移動していた）で刺した時は、刃物を抜いたらどっと血が流れる。見たこともやったこともないが、こっちの方が実際のだろう。具彦が直接見聞した流血、便りで知った継具の手首を切ったの自殺、彼をそこまで追いつめた戦場でのおびただしい流血。それでもその絵画は世間に発表されなかった、焼却もされなかった。厳重に包みこまれ、かつ題名をつけられて天井裏で日の目を見る時を待っていたのだ。卓はそれに精魂込めて寝食を忘れて向き合うしかなかった。

具彦にとって自分の画業の秘奥を描いたものなのだろう。人生の最後にはどうしてももう一度向き合う必要があった。次元の違う回路（のききもの）を通して小田原のアトリエまで行った。灯を点けるまでもなく暗間でその絵をみつめ続けた。眼裏には十分に視覚的記憶として存在するのだから

うが、「まぶたを閉じればありありと浮かぶ」といった通俗な表現では全く不足なのだろう。

最後の最後にはアイデア騎士団長が卓をつれてきた。卓の服装は現代人だし刃物は出刃包丁なのだが、アイデア騎士団長は具彦の描いた姿をしている。残された命の力を総結集してそれを見つめた。一方で、卓にとっても決定的な試練だった。基本的に穏やかな生活を好む男なのだ。そのアトリエでの食生活の如くつつましく性格的に、しかし手抜きはしないで。逡巡しつづける卓に、アイデア騎士団長は叱咤する。「まりえを救うために」、「邪悪な父を殺せ、それはさっき見た男女川の男だ（これを知っていることでアイデア騎士団長と卓の関係がみえてくる）」。身長60cmのアイデアでさえなく、自分の分身の如きものとされてやっと決断する。おびただしい血が流された（あとで出刃も死体も血も消えるのだが）。具彦は満足したのか深い沈黙の底へと沈んでいき、少しして穏やかに死を迎えた。流動食も延命処置も全て断つてのことだから、現代では「入定」の如きものといえるのではないか。

はたして具彦にとって絵画騎士団長に込めた想いはなんだったのだろう。画面の左下に「顔なが」を描いたのは何を表そうとしているのか。卓が地下への旅は代行することになりそこにはドンナアンナもいるのだ。ウィーン時代の恋人か。では流血の中に沈めたのは、なんだったのか。「敵」ではあるまい。アイデアの卓への叱咤から類推すると自分の分身でもある「邪悪な父」であり、阿修羅の如き復讐鬼か。発表された作品は静かな日常らしい、時代はちがっても。しかしそれは痛切な祈りであり、深い鎮魂でありつつ、戦争に代表される人々を流血へと押しやるものへの激しい告発でもあったのではないか。

小田原のアトリエからは洗面器の如く狭い海が見えるという。ジュラ島の北端の寒村にこもって執筆したジョージ・オーウェルのように、具彦の画業にはそのような人里離れた不便な場所が必要

だったのだ。当然まだ自動車など一般化しない頃であって、買い物でも一苦勞であっただろう。政彦が知っているのは、そして卓が使うのは、テレビやインターネットはないにしても、電気も水道もあり電話も通じるそれなりには便利な家なのだ。もっとも、具彦がここにアトリエを購入したころは（いつごろか、60年代か）そんなに特別に不便な場所でもなかったかもしれない。少なくとも飛鳥時代の庶民の生活よりは格段に便利だろう。具彦はその時代なりの便利さの正の側面（オペラを自室で聞く）を楽しみつつ、戦争に代表される負の側面を感じつつ、どちらも乏しい飛鳥時代の庶民を描いていったのではないか。そのためには小田原郊外の山の上よりははるかに便利な東京を離れて暮らす必要があり、家族的なものも可能な限り遠ざけていったのだろう。政彦には不満は残ったようだが。一方、卓は（村上春樹によって）芸術ではなく、少し変わっているが、最終的に現代の庶民生活を選ぶことになる。

飛鳥時代を選んだのははじめて全体としての日本が形成された時代だからではないか。明治時代も外国との緊張関係から日本が意識され、渉と卓の会話にあるように、洋画との対比から日本画という呼称も生まれている。幕末の攘夷運動から一転して西洋の文物がどっと流入し、政治体制も人々の生活スタイルも大きく変わった。江戸時代は幕府はあっても各藩は独立的だったのが、1つにまとめられていった。税制が変わり教育制度郵便制度も整えられ、なにより徴兵制も導入された。人口爆発といってよい急激な人口増加も起こった。江戸時代300年弱で人口は1.5倍になったが明治初期からの100年でさらにその4倍になった。産業の変化、西洋医学の導入など。封建体制では変わりようのない世の中が変わっていったのだ。この小説との関わりでは誰もが兵隊として戦争へいく可能性が生じた。一方主に渉が語ったのだが、土中入定、渡海入定などの宗教的自殺も禁止された。殉死も同様。卓が男女川の地で読んでい

た「阿部一族」<sup>註3)</sup>は3つの小編よりなる。第1作は乃木希典が明治天皇に殉死したのを知ってすぐの作、殉死に肯定的である。第2作が総題にもなった阿部一族で江戸時代の初期の殉死、殉死をめぐる微妙な武士間の意地のぶつかり合いから族滅にいたる。殉死がそんなに単純でもきれいごとでもないことを物語る。

もう一つ明治になって禁じられたものに武士間の決闘や仇打ちがある。ドン・ジョバンニが騎士団長を殺したのは手続きを踏んでの決闘だったので罪に問われなかった。正しい殺人は国家の専有となり、手続きを踏んでの死刑と戦争とになった。殺人も自殺も相変わらず存在するが、前者は法的な処罰の対象である。

西洋からどっと入ってきた女物の中に洋画がある。江戸時代後半には長崎の小さな窓からわずかに入ってきたが流布するまでには至らなかった。明治では身分制の崩壊や国策もあって洋画を志す人も増えた。約70年後には具彦が洋画から日本画に転じることになる。日本国内だけで各流派が各々の描法を守っている限りそれらをくくる言葉はいらないし、また、なかった。洋画に対峙するものとして、和絵具を使い立体性より平面性を重んじる一群の絵画が日本画と呼ばれるようになったのだ。類似のことは日本音楽、日本建築など各分野で生じただろう。

ところで飛鳥時代は6世紀から本格化した大陸文化の流入が律令体制として整えられていった時代だ。各豪族が支配していたのが大和朝廷に統一された。それまで主に朝鮮半島経由の流入だったのが遣隋使や遣唐使によって直接の導入になった。女物の流入のみでなく人物も往来し、直接知識技術を伝え学びにも行った。それらによって土地制度が整備され労役を含む税制も定められた。やはりここでも防人という徴兵制が重要だろう。庶民が突然見たことも聞いたこともないような遠方に送られ兵役に就かされる。具彦が主題に選んだのは、花鳥風月ではなく、そのような上からの

大変革の中を生きる人々の姿なのである。一般人の平均寿命は現代の1/3~1/2程度であっただろう。つまり生命にかかわる危険は今よりはずっと大きかったのだ。そのような潮流の大変化の中をなんとか日々を送る庶民、歴史にも全く名を留めない人々。そのほとんどは農民や漁民であろう。そういう生活を描いたのである。

## V. 「ただしい殺人ってあるの」と「カフカは坂道が好き」を巡って

前者はまりえが絵画「騎士団長殺し」を見て卓に投げかけた問いである。武士間の決闘は明治になって禁じられるまで、日本でも武士には権利でありいくらかは義務であった。殉死と同様に。西洋でも近代までそうであっただろう。

卓が具彦を尋ねるべく政彦を待っている間にスペインの無敵艦隊の本を読んでいるのを手掛かりとする。新大陸さえ往復できる巨艦をそろえて、宗教の正当性を質するという名目を立てて、新興のイギリスをたたきにやってくる。だが、イギリス人は地元の岩礁や暗礁を知り尽くし風向きにもなじんでいた。小回りのきく小型船で迎え撃つてこれを撃退した。いわば「正当防衛」の戦争である。もっともイギリスはその後、競争相手の他の先進国とも争いつつ、世界中に植民地戦争をしかけ、大英帝国となっていく。

個人間では現代でも正当防衛による殺人はある。身を守るためにそれ以外に手段がなければ、殺しても罪には問われない。過剰防衛であってはならないので、司法が判断することになるが、それでも人間のかかわる制度だ。裁判員制度があるので一般人がかかわることもありうる。正当防衛としての殺人と「ただしい殺人」はニュアンスが違うだろう。「やむをえない殺人」とでも呼ぶべきか。

卓は具彦の眼前でアイデア騎士団長を殺すことになるのだが、これは「ただしい殺人」か。身長60cmのアイデアは人間とは言い難いので、「ただしい

殺人か否か」という問い自体に意味がないともいえる。実際、政彦が戻った時、死体もおびただしい血も消えていた。たぶん出刃包丁はアトリエに戻ったのだろう。それでも卓の迷いは深い。アイデアが「まりえをみつげるために」、「具彦がそのシーンの再現を望んでいる」、「私が殺せと言っている」などと励ましても動けない。出刃が小さな心臓を貫くところを想像すると、心臓の不調を抱えて生き、それで死んでいったコミチのことを想起してしまう。アイデアがさらに「邪悪な父」と名称を与え、かつ直前に見た「男女川の男」と指定する。これで実行に移れた。手応えは殺人だ。その脂汗のにじむような苦悩と体中を貫くような体験は本物なのだ。それではじめて「内なる父殺し」となりうる。

「邪悪なる父であり男女川の男」である存在はたしかに卓の内なる何かであろう。凶暴でありつつ感情は素直であり、「まっすぐ遠くを見つめる」、海の彼方さえも。その肖像画を描こうとしても何色かの原色を塗りたくるだけで「形」を持たせられない。それでもまりえには姿が見えるのだが。それを「殺す」ということは自分の中の一部を殺すことだろう。当面のバランスのために、殺すことで生かすために、明白な決意を持って。無意識のメカニズムとしての抑圧とはここが決定的に違う。自分の中にそういうモノがあるという自覚、かつそれに操られまいとする決意。現れた「顔なが」を乱暴に扱って地下へと降りていけたのはさっそくそういうエネルギーを得たといっただろう。援助があったとはいえ、恐怖に打ち勝って服がすり切れるほどの狭い暗い横穴をついにぐりぬけたのだ。もっとも、完全に日常に戻るには渉という別の援助者を必要とした。地上へ戻り、東京へ戻り、袖に同居を申しでる卓は、少し変わったのだ。それを見てとれる袖も少し変わったのだろうが、それがどのような体験によるものかはこの作品ではわからない。

「カフカは坂道が好きだった」とアイデア騎士団

長がポツンという。フランツ・カフカも村上春樹にとって大切な作家の一人だ。ただ坂道が好きだったかどうか知らない。私なりに考えると昼間は公務員としてまじめに働き夜は執筆という2重生活をした作家だ。存命中はあまり評価されなかったが死後「神格化」された。ほぼ同時期を生死した日本の作家宮沢賢治と、没後の評価というこの点では類似する。作中の渉と卓の会話に登場する画家ゴッホもそうである。いずれも若死にでもある。具彦が生存中から世界的日本画家となったのとは対比的、芸術領域や時代や国情もずいぶんちがうけれども。

2重生活はやはり身体には相当にきつかったのではないか。職場への行き帰りに坂の途中で休んでいたのをアイデアがこう表現したのではないか。ただ、母や妹に助けられつつとはいえ、公務員を続けちゃんと出世もしていった。カフカが好き好んで選んだ生き方である。

ゴッホは弟に、賢治は実家にはほぼ全面的に支えられた。弟が画商として画材を提供し生活資金も提供しなかったら、ゴッホはもっと早く、ろくに作品を残すこともなくのたれ死んでいたことだろう。賢治も教職を捨ててより直接農民の中へ入っていきこうとし、一時は東京の宗教政治結社にかけこんだりもしている。ゴッホも貧民救済のために宗教家になったこともある。後には作画に集中したが、その生活は安定したものでは全くなかった。そういう中で大量の作品を残し弟が大切に保管したのだ。早すぎる晩年、一時両親の下に身を置いたが、この間の作品は両親に焼き捨てられた。賢治もその父親とは宗教を含め対立したが、原稿は残った。カフカにも賢治にも「未発表原稿は焼却してくれ」と言い遺したエピソードがある。実行されなかったので死後有名となった。2人の真意はわからない。自分で焼かなかつたのだから回りの判断にゆだねるという賭けにでたのかもしれない。当人たちは、死後であるし、どうかわからないが、作品を手取ることでできる我々

にはありがたいことである。

賢治には有名な「雨ニモマケズ」の詩がある。最後を迎えることになる病床で綴っていた病床手帳にあって死後発見された。彼にとっての理想の人生が描かれている。しかし丈夫な体を持つことはできず「ソウイウモノ」にはなれなかった。だが彼の渾身の願いは後の人々に生き方を考える上で大きな方向性を示したのではないか。暗い空の北極星のように。

没後に超有名になった点を除けば三者三様の人生である。生れる家も国も時代も選べない。だが、単純で素朴な運命論はとりたくないし、遺伝的決定論も幼時環境決定論にもくみしない。持って生まれたものを、多くは身体面でも精神面でもあまりに多く全てを知ることはとうていできないが、引き受けつつ、周りの濃淡多彩な人間関係の中で、各自の人生を生きていったのであろう。いうまでもなく多くの作品を残しても全く評価されない人々の方がはるかに多いだろう。知りようがないわけだが。

卓は芸術家への道は、当面、捨てた。妻と妻が他の男との間に設けた娘との人生を選んだ。どこまでが自由な選択かは難しいが、そこに選択と決断の意志はあるだろう。

ちなみに土中入定では地下の狭い空間を残して土で埋めてしまうし、南方浄土への渡海入定では小船は外から釘づけされてしまう。志願者は、はじめは決意が固くともそのうちゆるぐかもしれない。しかし後戻りはできないやり方なのである。

具彦は狭い山上にアトリエを構えた。やはり自らの選択と決定とみてよいだらう。画筆を持ってなくなってからは広々とした大海原を一望できる、高級施設で十分な世話を受けながら最後の日々を生きる。一人息子もよく見舞いにきてくれる。自らの一生を絵画「騎士団長殺し」に封じたのだが、それは一人の若者の人生に大きな転機を与え、特殊なルートを通して絵画を確認し、最後は眼前に再現されるのを実見することまででき

た。起承転結、完成だ。

しかしながら、鯛を追おうが白鯨を追おうが、鱈でも鮎でも、巨大なかじき鮪や凶暴な鮫であっても、遺伝や環境の中で選びつつ選ばれていくのだろう。食せばどれもそれなりにうまいのではないか。今は口にできないものもあるが。

## VI. おわりに

最後に野生動物への正確な知識と正しい接し方を書いておく。春に雪の消えつつある山に入るのは、キノコではなく、山菜採りだ。ヒグマにしろ、ツキノワグマにしろ最大の敵は人間である。特に銃を持っていると。だからラジオをかけて行ったり、大きな音で鈴（クマ除けの鈴）を鳴らして、人間がいるぞと知らせてやれば彼らの方で避けてくれる。もっとも秘密の宝の場所で他人に知られたくない時はこれができない。命と山菜やきのこ、どちらが大切か。こわいのは不時遭遇だ。彼らも何かに忙しくて人に気づかず、人間の方でも気づかなかった場合。急に走りだしたりしないで、こちらに害意のないことをクマにわかってもらわねばならない。モノの本には「何もしないから山にお帰り」と穏やかに言うといいと書いてあったが、そこまでできるかどうか。個人的経験ではリズムを変えないように注意して、歩き去った。200mほど離れて「もう安全だろう」と思ったら、どっと汗が流れた。

スズメバチ<sup>註6</sup>は越冬するのは女王蜂のみ（種類は各種あるが一番大きくて、一番危険なオオスズメバチ）。主に他の虫を食べるので、蜜蜂の巣を襲ったりするので凶暴性が目立つのだが、春になって十分他の虫が活動を始め、数も増えるころ冬眠から覚める。だから梅が咲きかかったころにはまだ冬眠中である。冬眠から覚めても一匹で小さな巣をこしらえ、幼虫を育てる。手下の働き蜂が羽化してそれが増えてはじめて女王蜂となる。それまで体力・運が続かないものもある。小さな巣がポツンと残り、中の数匹の幼虫は餓死してい

く。危険になるのは、数の増える夏以降、とりわけ巣を解散して働き蜂も死んでいくころ。複数の蜂がとんでいたら近寄らないことだ。巣があるかもしれない草叢にも入らない。巣を棒でつついたり、物を投げつけるなど問題外。無農薬で野菜を少々つくっている私にはとりにくいかつ数の多いアブラムシやチョウやガの幼虫をとってくれるので益虫である。

作品中では青天の霹靂の意外性のために使われたエピソードのようであるが、人気作家で影響力も大きい人なので、野生動物の理解のために、正しい付き合い方のために余分なことを書いた。一度刺されてしまって、アナフィラキシーの心配な方は、専門家に免疫反応検査をしてもらい、反応が激しければリコペンを所持するようおすすめする。これはこれで人体の免疫反応との正しい付き合い方なので。

#### 註

- 1) アーシュラ・K・ル＝グウィン作 S.D. シンドラー 絵 村上春樹訳 空飛び猫 1993 講談社。この3人による「帰ってきた空飛び猫 1993 講談社」、「素晴らしいアレキサンダーと、空飛び猫たち 1997 講談社」の3部作。ル・グウィンにはより大作の「ゲド戦記」があり、ゲドは実際の地下の穴をさまよったり、あの世としての地底に冒険する。そこは全く別世界が小説の舞台となっているが、「空飛び猫」3部作は、現代の都会と農村を舞台として架空の空飛び猫たちが活躍する。特に第3作は末子ジェーンが恐怖のあまり声を失っているのだが、ふつうの猫アレキサンダーがセラピー猫になってジェーンが声を取り戻すのを助ける、援助された者が新たな援助者となるファンタジー。村上春樹の丁寧な訳注と解説があり、ファンタジーの大切さも語られている。
- 2) 更科功 2018 絶滅の人類史 NHK 出版新書。年代測定法の改良やゲノム解析の進歩による新しい知見が紹介されている。
- 3) 森鷗外 1938 阿部一族 岩波文庫 解説は斎藤茂吉。
- 4) カフカ・F 池内紀編訳 1998 カフカ寓話集 岩波文庫。池内がカフカであちこちに発表したものや未発表のものを編集し訳したもの。寓話集という題名は池内がつけたのだが、特に意味はないという。カフカによる絵画も少し紹介されている。カフカの生涯についてはこの本の解説によった。
- 5) モリエール 鈴木力衛訳と解説 ドン・ジュアン 1952 岩波文庫。1665年に初演された戯曲、鈴木由の解説によって、当時の演劇界の事情やドン・ジュアン伝説の流れ、また文学史的・社会現象的位置づけがわかる。
- 6) 中村雅雄 2018 スズメバチの真実 八坂書房。世界のスズメバチが紹介されている。本書と私の個人的観察に基いてスズメバチについて述べた。女王バチが一匹で小さな巣を営んでいたのに死んでしまったらしくひからびた小さな巣、夏ごろまで育ったらしい20cm程の無バチの巣を見つけたこともある。スズメバチにも天敵、自然災害、病気などの脅威があるようだ。現代では人災が最大か。

## ABSTRACT

Some Personal Thoughts on Haruki Murakami's Novel "Killing Commendatore"

AOKI, Kenji

*Konan University*

This essay tries to decipher Haruki Murakami's novel "*Killing Commendatore*". The novel is about the reunification of a man and wife who are in their 30's and started to live separately after few years of their marriage. It also shows the conflict and suffering of the husband until their relationship returns. To recover the tie between man and women also needs plenty of dramas.

In that process one can also see ordinary people suffering from irresistible man-made disaster such as wars, natural disasters such as earthquakes, tsunamis. Furthermore, it also reflects the relationship between the artist and his work, his life and the society that evaluates the artist. When these three streams flow into each other they sometimes separate and integrate in a complex manner. Its complexity and beauty can not be analyzed like food composition table. In this regard, this essay might not be easy to understand, however it is worthwhile to interpret it.

*Key Words* : mental phenomenon, relations between the sexes, blood relationship, meaning of life

---